

## 教えること

2025.9.1

教えることが好きかというと、好きなのだと思う。だから、教員になったのかもしれない。中学生に対して、ソフトテニスの指導をしている。子どもたちは、一生懸命練習している。当たり前だが、自分がボールを打っている姿を自分で見ることはできない。だからかもしれないが、どうしたらうまくボールを打てるようになるのか。そのことに自分で気づくのはむずかしい。

そこで、他の人からのアドバイスが必要となる。今の打ち方は、こうなっている。ここをこうするともっとよくなる。そのようなことを説明したいのだが、理論的なことを言ったからといって相手に伝わるとは限らない。相手は、ソフトテニスを始めて、まだ数ヵ月から1年あまりの選手たちである。

その選手に合わせたアドバイスが必要になる。理屈で説明したほうがよい選手もいる。そういう選手は、話を聞いた後に納得したような表情を見せる。一瞬、目が輝く。そして、ボールを打つ。うまくいく。ほめられる。さらにがんばろうという意欲が増す。

逆に、理論的な説明ではなく、「ビュンとふるイメージ」「ポン、ポン、ポンという感じ」などと擬態語を使ってのアドバイスのほうがいい選手もいる。何だか故長嶋茂雄監督のようである。いずれにせよ、うまくボールが打てるようになればよい。

これらは、自分が実際にソフトテニスをやったことがあるからこそわかる感覚である。男子に多いが、最初からきれいにボールを打つ選手がいる。ボールをとばすための体の使い方が自然である。こういった選手には、あまり余計なことを言わないほうがよい。せっかくの才能を邪魔しないに越したことはない。

どこにボールを打って、どのように動いてというゲームの中での動きとなると、さらにアドバイスはむずかしくなる。その選手の頭の中に、テニスコートが平面ではなく立体的に入っていないと、理解するのはむずかしい。実際にテニスコートで動きながら説明するようになる。だが、意外と理解してもらえない。テニスコートが書かれた作戦ボードのようなものを使って説明する。こちらのほうがわかる選手もいる。

教えるのは実にむずかしい。だが、必ずポイントはある。それを相手に合わせて、どのように伝えるか。常に試行錯誤である。教えるとは、こちらが話したから、それでいいということではない。相手が理解して、できるようになって初めて教えたとなる。したがって、あんなに教えたのにという指導者がいるが、それは教えたつもりになっているだけである。教えるとは、そんなに簡単なことではない。

ソフトテニスの練習が終わった後は、落ち込んでいることが多い。ああ言えばよかった。あそこで、アドバイスすべきだった。いつもうまくいかない。それでも、選手たちがいいボールを打つとうれしい。「いいよ！」「ナイスボール！」こういった言葉をたくさん言いたい。そのためには、指導者としての眼力をさらに鍛えていかなければならない。